



今、「書くこと」を考えて

「書くこと」は、自分が誰であるかを再構成するもの。「思い」や「考え」を、誰かに伝えることの一つが、「書くこと」でもある。言葉の混乱、伝えるべきものの喪失。そんな時代だからこそ、再び、「書くこと」の意味の方へ、視線を投げかける試みが求められる。「書くこと」は、人間そのものであるから。

中西 読む・書く」「話す・聞く」ことは、他者との関係を育む基本です。今日はその中でも特に「書くこと」を中心に、静岡大学学長である伊東先生と「学研」の大堀編集長に、お話を伺いたいと思います。

「書くこと」と、「コミュニケーション」

中西 大堀さんは、小論文指導で、全国を講演して回られていますね。書くことについて、どのようにお考えですか。

大堀 「書くこと」は生きる力そのものですが、いざ書くとなると、なかなか難しい。まず、書くべき内容の蓄積がないと。その蓄積は、読む行為から生まれると考えます。

中西 伊東学長は、昨年までは情報学部で、「認知や人工知能を研究しておられましたね。

伊東 ええ。「読むこと」は、自分の中で世界を構築するプロセスですね。「書くこと」は、自己を客観的に見つめることで成り立っている。自分の思いや考えていることを構造化して外化することですね。

中西 文科省は、来年度から「聞くこと」「話すこと」を指導要領に盛り込む方針ですが、それは現代の子どもたちのコミュニケーション不足があるからでしょうか。

大堀 マニュアルで問題を解消しようとする即戦力養成のようなものではない、疑問ですね。読むことは、他人の書いたものを理解しようとする行為。そのように「他者への接近」がなくては、「書くこと」はままならないのでは。

自分と考え方が違う者と
中西 伊東先生、学生はどうして「書くこと」「読むこと」をしなくなったのでしょうか。
伊東 昔の学生も今の学生



伊東幸宏さん 静岡大学学長。工学博士。全国の国立大学で最年少の学長であり、新しい取り組みが期待されている。情報処理学会・人工知能学会・電子情報通信学会・言語処理学会・教育システム情報学会・他所属。東京都出身。早稲田大学理工学部卒。

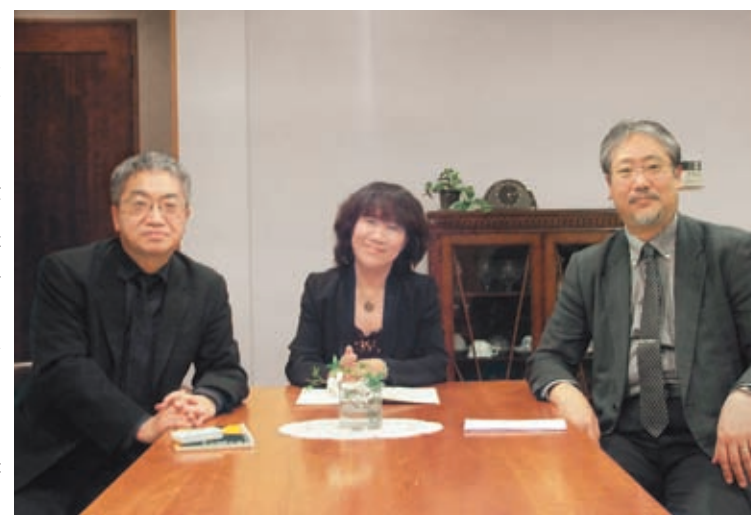
大堀精一さん 学研に入社以来、受験雑誌、受験参考書、模擬試験など、高校生を対象とした分野で仕事を続けている。現在は月刊情報誌「学研・進学情報」監修、小論文入試問題分析プロジェクトチーム編集長を兼務。毎年全国各地の高校生・先生を対象に1年間に200回以上の講演を行っている。北海道小樽市出身。北大文学部卒。



も、そう大きく変わってはいませんが、今の学生は、とても忙しいです。遊びのバリエーションが昔と変わってきていますし、ケータイのチェックにも忙しい。またインターネットなどのITの影響もありますね。社会の変容をもろに受けるのが、学生も含めた若い人です。

大堀 現代は、どこか他人に無関心な感覚があるように感じます。他人に関心がなかったら、「書くこと」や「読むこと」は成立しません。本を読まなくなつた原因の一つに、他人への関心が薄くなつていることが挙げられるのでは、と思えます。自分の知らない世界を発見することは、他人の書いたものを読む、という行為からです。

「書くこと」と対話
中西 読むことが「他者の発見」であるのなら、書くことは「自己の発見」だと私は思っています。論文などを書きながら、生徒が行き詰まることがありま。そんな時「こちらから違う視野を示唆します。すると目が輝きます。世界を見る喜びがそこに生まれるからです。昨年慶応大学の小泉信三賞を受賞した生



徒などは、大人でも難しいトクヴィルの「アメリカの民主主義」やベンヤミンなどを読んでいます。書くことを楽しめるようになった子は、難しいことにも挑戦できるようになる。考えることが楽しくなると、好奇心の広がりも見えます。

伊東 学長になってできなかったのですが、若手教員のこころは、学生と論文を巡って、言葉のキャッチボールのようなことをしました。「書くこと」は、自分の生きてきたことそのものです。また「書くこと」は、多様な解釈が可能な世界の一つの視点から具体化することでもあります。学生の視野を、少しでも広げようと思うと、どうしても対話が必要になりますね。

大堀 ある高校の授業を参観したことがあります。討論の時間。ところが話すのは先生だけ。一方通行の不思議な討論の時間でした。学校の中で欠けているのは「対話」なのでは。言葉のやりとりの中で、生徒は深化し鍛えられていく。

中西 ハーヴァード大学のサnder教授の「白熱教室」は、激しく討論すること有名です。ですが、討論するための思考力や判断力がないと対話でも

大堀 高校生に論文の指導をする時、矛盾を感じるのです。受験に論文が必要だから、書き



中西美沙子さん 教育コーディネーター。執筆講演活動のかたわら、さまざまな部門の文化事業を展開する株式会社クレアシオン代表。著書の「ヒアニングでね」（東京書籍）は、中日新聞に連載した人気コラム「つかまえて！こころ」をまとめたもの。

たい動機がなくなると彼らは書く。本当は、「書きたい」という欲求があるところで、指導できるのが理想です。

伊東 書くことが敬遠されるのは、書くためのツールの変化もあるのでは。鉛筆やペンで書く行為とパソコンの違いです。ネットがつながった時、感覚の転換みたいなものが起こった。それが、「書くこと」の個人的な営為が消えて、「書かれたもの」を検索して置き換えることが常態になってきたからです。しかしITはツールにすぎません。



「鬼楽坊」が教室を見守っています。前島秀章作

ハサミと同じで「使いよう」。

中西 人は他者や社会に関心を持ちながら生きる生きものである。スコールでは鉛筆で書くよう指導していますが、それは、書くことは身体とつながっていると思うからです。「書いた」「消したり」する行為には、思考の蓄積に等しいものがあると考えます。

「書くこと」の現実
中西 学生の論文については、いかがですか？
伊東 今の若者はブログなどで「思い」を表現することは上手ですし、「書くこと」に抵抗もないのですが、論文のように「考えを書くこと」は苦手ですね。「…と思う」は感想です。「…と考える」のなら、その根拠を探索せ論理的になるよう指導します。

中西 書くことの衰退があるとしたら、今、何ができているでしょうか？
伊東 幼児期からの体験の在り方が大切だと思います。「読み聞かせを母親なり父親が楽しんですること。読み聞かせは、「構造化された言葉」から連続的世界を再現することの体験。さまざまな記号を組み合わせたのが言葉ですから、その言葉を聞いて情景を思い浮かべること、記号の意味の組み合わせ方を知るようになるからです。

大堀 僕も「読み聞かせ」は、「書くこと」への近道だと思えます。ITは想像力を奪つようには働きます。ですから、小さなころから言葉に触れることは大切で、書くことは難しいですが、本を読んでもらうことで、本に興味を持ち「読むこと」につながると考えます。それから「書くこと」が始まるのでは。「書くこと」がなくなるのは、興味深い話が続いてきました。脳に障害のある子どもが、読み聞かせで回復したという話です。家族だけでなく、ボランティアなどの他人も、その子に繰り返し読み聞かせをしたそうです。言葉の意味を理解できない幼児が、読み聞かせで言葉を覚えていく過程と、どこか似ています。

中西 スコールでは書くことだけをしていません。教材を作り、今社会で起きている問題をテーマに、読み合わせ、考えさせています。小学生の子どもたちには、授業の前に「ビッグニュース」という時間があります。彼らの中で起こった小さな出来事を聞くのです。共感や共有という感覚を、言葉を通して伝えたいからです。

大堀 学校の論文指導を見ていると、形を整えようとしているですね。良いところを褒めるより欠点を指摘する。下手な文章でも、良いところは必ずあるものです。褒めることは、その子どもを認めることです。他者から認知されなくては、他人にも関心が向きません。現代は、どこか認めるというのをしない社会になっているように思えます。

伊東 現代は、不思議なことに出会いが、共有されにくい時代です。不思議なことに出会った時、一緒に驚いてくれる大人がいない。「ふしぎだね」「どうしてだろうね」と語りかけてくれる人。驚いてくれる大人がいないと、「驚くこと」はできないのです。初等教育から良い本を多く読んだり読み聞かせられたりすれば、感動を共有することができると考えます。論理的な思考や批判的な考えの芽が、そこに生まれると思えます。「書くこと」は、それから始めてもいいのでは。

大堀 読むことは、自分の言葉を抱くことです。そこから表現したい欲求のようなものが生まれます。それが、「書くこと」ではないでしょうか。

中西 今日はそれぞれの立場で、「書くこと」や「読むこと」の大切さをお聞きしました。人は言葉を発見して、人間になったと考えます。人や社会との関係、文学や思想などは言葉なくして表現できません。その言葉の力が劣化しているとしたら、いま一度考え直してみる必要があります。お二人には、そのヒントを頂いたように思えます。ありがとうございました。